

滞英2年の 生活を顧みて

- 8 -

庶民の生活(3)

ホリデー

砂川一郎

英国の大学は 休暇が大変長い 夏に3ヵ月 クリスマスと春に約1ヵ月づつの休暇がある。つまり学生は1年の半分位も休暇ですごすわけである。一般の勤め人も 年に20日前後の有給休暇がある。この休暇期間中に 1年かかって貯金してきた金のほとんどをつぎこんで 国内 国外旅行をするのが 学生のみならず英国一般庶民の 下は小使さんから上は大臣までの最大の楽しみである。旅行も 1日・2日と言った小規模なものではなく ずいぶん安サラリーの人でも 1週間 10日という規模で旅する。ともかく 英国人はホリデーについてはまったくクレージーで 年末頃から来年のホリデー旅行のプランを建て 予約の申し込みをしている。実際有名地はそのぐらい早くから予約しておかないとホテルがとれないことが多い。したがって大は トーマス・クック社からはじまって小は 裏町の小さい旅行社までたくさんの数の旅行業者があり 大きいところは自分で経営しているホテルやホリデーリゾートの施設をもっているところもある。毎年各社で国内 国外旅行のプランをたくさんつくっている。これは たいいていグループで行くプランで 日本の団体旅行と同じである

ただヨーロッパ大陸の数ヵ国をかけたまわったり ソ連各地の一周といった具合に 規模は日本のものよりも大きい。団体でゆくので 費用もそれほどかからずフランス イタリアの10日程の旅が一切こみで3~5万円位であげられる。勿論パーミュダーやアゾレスのように飛行機で飛び南国の太陽を満喫するといった金持用のプランもあるし 豪華船で世界一周といったプランもある。安い国内旅行から 高い海外旅行のプランまで多数のプランが各旅行業者でつくられているから 適当なものを選択し 金を払ってサインさえすれば あとは一切を業者がやってくれる。パスポートや外貨の世話だけでなく ホテルや汽車・船の座席の予約まで一切である。だから業者に頼みさえすれば あとはそこでつくってくれた予定表に従って歩けば全部ぶじにすむというわけである。こうした既製品の旅がきらいな人たちは 自分の車でスコットランドやウェールズの方を放浪してまわったり 船や飛行機で自家用車ともどもドーヴァー越えをしてヨーロッパ大陸を旅行してまわる。

自家用車旅行でも結構安上りの旅ができるように色々施設ができています。たとえば 小さな田舎村落へ行っても探せばたいいていみつげ出すことのできる bed and breckfast (B.B)。これは一般の民家が内職にやっている手軽な宿屋で ベットと朝御飯だけを出してくれる。フロには入れない。これで安いところで10シリング(500円) 高いところでも1ポンド(1000円)位の宿代である。それでいて結構よい部屋に泊まれる。普通のホテルに泊まれば 安くても1泊朝食つきで 25シル(1250円)から30シル(1500円)はとられるから B.B.は格安である。昼食は野外で自炊し 夕食だけどこかのレストランでとれば結構安く旅行することができよう。

それから キャラバンをつかうのがかなり普及している。これはベット・キッチン・トイレなどが一式ととのった大型のトレーラーで 自家用車のうしろにつけて旅行し 適当なところで停めて自炊すれば 大変安上りにつくというわけである。もっとも家のない新婚夫婦などは トレーラーだけを買ってそれを家がわりにして住んでいる人もある。いずれにしても あれやこれやとホリデー旅行が安上りでできるような工夫がなされているので たとえ安サラリーの人たちでも 1週間・10日という長いホリデーを楽しむことができるのであろうし 又皆ホリデーで思い切り楽しむために常日頃儉約してお金をためている。最近では ヨーロッパ大陸への旅行だけでなく ソビエトへのホリデー熱が大変高まってきているようで 各種のプランが各社から出されているし ケンブリッジ大学生たちが バスを一台借りて 自分たちで運転しながら ソ連領土内のホリデーを楽しんだそうである。この夏にもカレッチの友だちから モスコウの絵葉書が送られてきたし ともかくソ連領への旅行も英国人には簡単にできるらしい。もう一人の友だちからはイタリアのベスピアス火山の絵葉書が送られてきた。私もまた最初の年には 友人2人と共にフォードコンサルを借りて湖水地方からスコットランド1周の旅を楽しみ 2年目には コーンウォール地方で10日ほど夏の休暇を楽しんだものである。

娯楽

日本の勤め先では 昼休みたいいていの勤め人が 碁をやったり将棋をやったりする。街々には パチンコ屋がはらんし 麻雀荘や碁会所がある。何処に居ても娯楽の場所にことかかず ちよつとした時間つぶしの種に困まることはない。ところが 英国人はこれとは正反対に およそ時間つぶしの種が少ない。カレッチの昼休みは 正1時間あるのだが 食事がすんでスタッフ用の common room にコーヒーを飲みにくる人々は

そこでコーヒーをすすりながら談笑するか 備えつけの雑誌や新聞に目を通して休み時間をすどすどが精々で 碁 将棋に類する遊びをすることなど全然ない。若干の研究者たちは Nature や Times などに出ている大学や研究所でのポストの公募欄でよい地位を探して時間をつぶすか それもあきてくると 誰言うとなく “have a walk” と声がかかって 4～5人つれ立つてカレッヂの庭の散策をして昼休みをすどす。昼休みにトランプを楽しんでいる人たちや 西洋将棋を戦わせている人など全くみたくもないのである。たいへん健康的であるといえよその通りであるが のんびりと碁でもうって昼休みをすどす日本式の休憩時間になれていた私には 最初とかくとまどいがちであった。こうしたやり方は なにもレッヂに限ったことではない。実際ロンドン市内の目抜き通りや観衆街を歩いてみても パチンコ屋とか射的場に類する遊戯場は全くないと言っても過言ではない。東京の浅草にでも比べることのできるソホー地区ですら パチンコ屋に類する遊戯場は 私の知る限りでは 2軒しか存在しない。ましてや西洋将棋場みたいのところを私は知らない。大体西洋将棋は日本の将棋のように庶民のものでなく 上流の遊びに属するのである。酒場でも置いてある遊び道具は 精々ダイスカダーツぐらいのものである。たまに町はずれにジプシーが集団でもってくる遊戯場が開かれ パチンコ機械やルーレットのたぐいの小ばくちが行なわれることもあるが それにしても大変ひん弱で一般的ではない。ともかくことこの種の娯楽に関しては 日本に比べて英国はたいへん貧弱で こうした遊び道具で楽しむとすることはしない。ただ1つ 英国庶民の間で広くまんえんしている小とばくちがある。フットボールプールである。例のトトカルチョというかけは 元来は英国のフットボールから由来しているものでそれがイタリアに導入されてトトカルチョと言う名で呼ばれるようになり さらにそれが日本に輸入されようとしているのである。フットボールプールとは1回に50円のかけ金を出してその週のたくさんあるフットボール試合の予想をするもので 完全的中者の数に応じてかけ金が分配される。だから時に只一人しかの中者がなく数億円にのぼるかけ金を一人で貰い一時成金になるものもいるわけで 毎年何人かがフットボール成金になっている。このプールには階層をとわず皆熱中しており 大学の教授でも多額のかけ金を獲得した人がいるほどである。私も何度か試してみたがいつも失敗であった。

映画は製作本数からゆけば精々日本の 1/3 乃至はそれ以下しかつくりされていないであろう。私は独り身で暇

があったから 1週に2本時に3本位をみていたが これだけみせると近在10マイル範囲内に存在している映画館の何処をかけたまわってみても皆みせなかった映画ばかりとなってしまう。事実 友人と2人でまだみていない映画を上映している映画館を探がし出すために車で2時間近く もぐるぐる近在の町々をまわりつくしてあげくのはてに何処にも新しい映画をみつけ出せないのでしまったことがある。映画の本数が少ないかわりに映画館自身は日本のものより大部きれいだである。たいていの田舎の映画館でも館内は じゅうたんがしきつめてある。面白いことに 英国では映画館の中で 喫煙が自由で客席に灰皿さえ備えつけられている。同様バスや電車や地下鉄の中でも喫煙自由である。ただしバスは2階でのみ 地下鉄や電車は no smoking とめい打ってある車両以外の車などの車両でも煙草をすうことができる。これはいささか意外な習慣であった。英国滞在中たくさんの英国映画をみて 一つ感づいたことがある。それは英国の中に占める怪奇残酷映画・グロ映画・法廷映画の比率が意外に高いという事実である。たいていの映画館は2本立興行であるが そのうちの1本は必ずと言ってよいくらいこの種の映画で占められていた。たとえば吸血鬼ドラキュエアとか フランケンシュタインとかいった類の映画である。あるいは日本軍の残酷行為を極端にとりあつかった「血の島の収容所」といった類のものである。この種の傾向は映画界に限ったことではなく 何処の本屋の店頭にもたくさんのエロプロ小説が氾濫しているし 暴行事件や姦通事件の法廷記事を売物にしている日曜紙 News of the World が英国一の発行部数をほこっている事実 テレビの人気番組の “Emergency World Ten” が主として病院での急救患者の手術シーンでもって人気をかちえている事実など いたるところにみいだすことができる。こうやってみてみると 英国人は大変サディズム趣味をもっているようにおもえてくる。しかし前にも書いたように英国国民の生活の90パーセント以上はたいへん健康的なものである。だからつまり 残りの数パーセントの所に人間悪をさらけ出すところをもっており それを安全弁としているのだと言えよう。あるいは悪く解釈して言えば 表面上の生活で紳士をよそおっていねばならないので こういうところへそのゆがみが露出されているのだとも言うことができよう。このバランスは政治のやり方でもとられており たとえば ハイドパークでの演説会という形であらわれているのであろう。映画館の数に比べて芝居小屋の比率はたいへん多い。小さな田舎町に行っても芝居小屋があり 古典劇・創作劇などが上演されている。こういうところは 毎日ひらくわけで

はなかろうが 少なくとも日本の場合よりもはるかに演劇が庶民の生活の中にとけこんでいると言うことはできよう。決してインテリ階級だけのものではないようである。

新聞

英国の新聞というとなず The Times とか Guardian などを思い出す。この2紙がまず英国の新聞を代表するものであろう。そしてこれらを読んだ人達は 記事内容の高級さと豊富さに又ニュースが広範囲 かつ正確であり一方に偏していないことに感心させられ 英国人の教養の高さにびっくりすることであろう。そしてそこから英国人全般の教養の高さについての誤った結論を導き出しかねない。たしかにこの2紙は英国の新聞を代表するすぐれたものであろうが 決して典型的な英国の新聞ではないのである。発行部数も日本の3大新聞に比べると桁違いの少数しか出されておらず 読者層も上流階級乃至インテリ階級のきわめて限られた階層だけである。これら2紙以上に発行部数も多く 庶民の間で広く読まれている新聞が五指に余るほどある。それらがいづれも夫々に強い個性と はっきりした政党色をもっている事も日本の新聞との大きなちがいである。たとえば デリーテレグラフ紙は ニュース記事の豊富な点では タイムズと同格で高級紙の部数に属するが 実にはっきりと保守党色をもっており ニュースの扱い方から選択の仕方に至るまではっきり右偏している。これに対して たとえばデーリーミラー紙は 労働者階層に広く読まれ発行部数も一番多い新聞だが 読むというよりは見る新聞で タブロイドの小型判である。トップにヌード写真をもってきたり 「ストライキが解決できないような馬鹿者の政府なんか即座に止めてしまえ」といった種類の主張を大きな活字で数行だけ印刷したのが第一面になっていたりする。又発行部数の比較的高い新聞の多くが連日のように離婚裁判とか暴行事件などの法廷記事を実に詳細に取扱っており 又上流階級や芸能界のスクランダル記事でうずまった欄が半頁から一頁にわたってある。スポーツ記事にももちろん力が注がれており 共産党系のデーリーワーカーが かつてかなりの発行部数をほこったのも すぐれたフットボール記事をもっていたからだそうである。いづれにしてもこの種の新聞が庶民の間で一番広く読まれている新聞であり 決してタイムズなどの高級紙が英国で一番広く読まれているわけではない。同様なことが日曜日のみ発行される日曜新聞にもうかがえる。Observer や Sunday Times などは高級紙として日本でも広く知られているが 圧倒的に高い発行部数を誇っている日曜新聞の

News of the World (ミス ワールドコンテストの主催誌) は スキャンダル記事 法廷記事 エロ・グロ記事で充滿しておりそれを売りものにして部数をのばしてきたといわれている。これなどは日本の或種の新聞よりも程度が落ちるようである。

サラリー・物価

英国での平均サラリーは 日本人の約3乃至4倍と考えて間違いない。教室の工作室に勤めている17~8才の実験助手が週6~7ポンドをもらっている。月給になおして3万円前後か。私と同年輩の大学の助教授が月130ポンド(13万円) 大学教授で年俸2000~2500ポンド(月17~20万円) のサラリーを貰っている。Ph. Dをとったばかりで D.S.I.R. から post doctorate fellowship を貰っている研究者が 1000~1300ポンド位の年俸である。さらに一般的に言って会社に勤めている人たちは官庁 学校に勤めている人の1.5~2倍近いサラリーを貰っている。大学に居る人達は上記の正規のサラリーの他に試験の採点などによる特別収入がある。中・下級のサラリーマンでは 普通週給制で毎週金曜日にサラリーが支払われ 上級サラリーマンや大学関係の人達は通常年俸で 支払いは3カ月に一度づつである。物価は物によっては日本より高く 物によっては低い。平均して1.5倍位にあたろうか。安いものはバター・チーズ・ミルク・肉類・自動車・洋服類・靴等で 高いものは日用雑貨・家具類・家賃・交通費・レストランの食事代・煙草・映画代等である。

たとえば 煙草は20本入200円 食事は最低に食べても1食200~300円はかかる。交通費は約3~4倍 家賃も約2倍であるが 靴は標準のもので2~3000円 洋服も日本並乃至それ以下で良質のものが買えるし バター等の食料品は日本より少し安目である。従って日本並の生活をしようと思えば結構安くて暮せる。私の場合2食付の下宿代が週4500~5000円 カレツヂでの中食代が週約1000円 その他に週1~2回の映画乃至はロンドンへ出て少し豪華な支那料理を食べても 月に3万5千円から4万円位でまかなえた。もっとも一般の生活水準が高く 食費や住居費に日本の場合よりもづっとかけているから3~4倍のサラリーを貰っていても結構つましい生活をしている。ちなみに 英国人は一般に食費・住居費には金をかけるが 衣料には日本人程 金をかけないようで 私は日本に帰ってきて 英国人に比べて日本人が皆ずっと立派な衣服を常用しているのを知ってびっくりしたものである。貧弱な家に住み 貧しい食事をとりながら着るものだけは立派なものを着ているのに……。平均物価が高く 生活水準が高いので 高

いサラリーをとりながら結構つましい生活をしている英国人ではあるが 社会保障が完備しているので 病気になってもあるいは老年になっても 金銭的な面で余り心配する必要がない。 医療費はどんな病気でも診察・投薬・入院・手術等の費用は一切無料であり 年をとれば誰でもかなりじゅうぶんな年金が貰える。 こういう点までひっくるめてみると 日本より生活水準が高く 生活が楽であることはまちがいないようである。

気 候

ロンドン は 緯度が 51.5° で北極太あたりに相当する。 だから日本人からみると大変寒冷の地で 冬中雪に埋もれているように想像されるが 実際は暖流の影響で 真冬でも東京の冬よりもかえって暖かい。 天気が良くなると酷しい寒さになるが 冬場にはほとんどお日様が射す日がないから 平均して東京よりも暖かいといえるであろう。 雪も年間 2~3 回降る程度である。 そのかわり有名な霧は想像以上にひどい。 日本で霧らしい霧に会ったことのない私は 最初の霧に出会ったとき ロマンチックでたいへんに詩情をわかされたものであるが そのことを話したら 英国人皆にとんでもない奴だとひどく怒られたものである。 私のこの詩情も 数日後友人と一緒に映画をみての帰途 深い霧にみまわれたときには完全に吹き飛んでしまった。 車で帰ってきたのだが 最除行で動いていても 何度歩道に乗りあげたり 別側に行ってしまったりしたかわからない。 普段なら 10 分位で帰れるところを 1 時間半もかかってしまった。

よく新聞ラジオで visibility null (視界零) と言うが 文字通りその通りで 50cm 先がみえないことすらある 霧に見まわれると 電車もバスもストップするかひどく遅延してしまふから 霧がまき出すと皆取るものとりあえず 逃げるように帰ってしまう。 一寸遠出でもしていようものなら 家に帰りつくことが出来ず 路上に車を止め車中で寒い一晚をすごさねばならない破目になる。 私の住んでいたところはロンドン郊外の田舎で霧も乳白色できれいであったが 市内では工場や家庭のどんろから出る石炭の煙と霧とがまじり合って 黄褐色や灰色のいわゆるスモッグになってしまう。 こうなると 激しく気管を刺激するから 気管の弱い人は大変である 数年前にある霧の深い晩一夜で ロンドン市内だけで 1000 人を越える人が気管をやられて死んだ記録があるそうである。 こうした霧が 1 日で納まればたいしたことのないのだが 2, 3 日ひどいときには 1 週間と続き その間完全に霧にとどこめられてしまうのである から 英国人が霧を憎悪する気持も もっともだと思われてくる 英国で一番よい季節は 5 月・6 月である。 冬中ずつ

と頭上にかぶさっていた雲も晴れ 5 月の太陽が顔をみせるとありとあらゆる花々が一挙に咲き出す。 可憐な Snow drop, Blue bell など みごとなのはしゃくなげの花である。 しゃくなげは身の丈の 2~3 倍の大木になり 花も大輪かつ八重で 白・赤・紅・まだらと色とりどりである。 黄水仙も美しくカレヅの庭一面に野生の花が咲きみだれるシーンはまことにみごとである。 この頃は日も長く 夏至の頃には夜 10 時半か 11 時頃まで たそがれがおとずれてこない 恋の花が咲き あちこちの公園の芝生で若い男女が公然と抱擁する姿が花々の合間にみられるのもこの時期である。 7, 8 月の盛夏になっても 気温は平均 17~18° で どんなに暑くても 30° を越えることは殆んどない。 冬服一着で夏冬すごすことができる気温である。 洋服をきちんと着用している英国紳士のでん統も 実はこの気候から生まれているのだということがわかる。 夏が過ぎると一挙に冬がくる。 英国には はっきりした春・秋の季節はない。 おまけに 1 日のうちに冬と夏とが共存していることすらある。

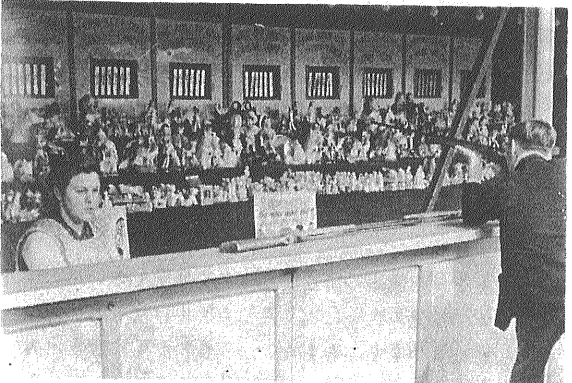
しょぼしょぼと霧雨の降る日が夏冬を通して多いが 温度は日本の梅雨みたいに高くなく おまけに気温が低いから かびが生えることもない。 食料品も冷蔵庫に入れておかなくても平気で 一週間位もたせることができる。 しょぼしょぼ降る霧雨のおかげで 芝生は実に美しく生えそろう。 英国で印象深く思ったことの一つは 真冬でも緑したたる芝生が至るところにあり 赤黒い土の色や泥ねいを殆んどみないですむことであった。 どの公園でも 立入禁止をしている芝生はほとんどなく 自由に歩くことができるのも英国ならではの風景であろう。 激しい雨はほとんど降らないから 大部分の英国人は洋傘をもっていない。 黒い洋服 山高帽腕に洋傘という英国紳士の姿が頭にしみついていて私たちに 町中誰一人として洋傘をもたずに雨中を歩いているシーンは まったく意外のものに映る。 雨が降り出すと 男はよごれたアルペン帽みたいなものをかぶり 女はビニールのレインコートを取り出す。 強い雨に出会すとしばし軒先で雨宿りをするまでである。 洋傘をもたない習慣であるから 洋傘を売っている店も少ない。 英国に到着した当座 洋傘を買うのに私は随分苦労したものである。 又往航でイタリアに寄ったとき 英国紳士の姿を頭におきながら 黒いソフトを買い 到着当座得々としてそれを被った私も 誰も帽子を被っていないのに気がついて 数日でせっかくのソフトをダンスの興ふかくしまいこんでしまはねばならなかった。 想像していた英国人と実際の英国人とは いろいろな面で随分違っていたのである。 (筆者は技術部 地球化学課)



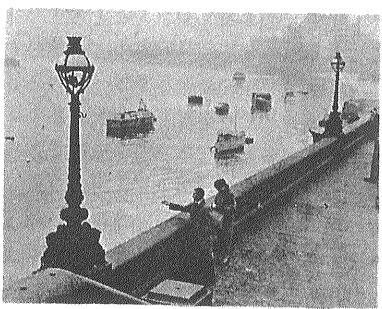
街の広場にできたジプシーの遊園地



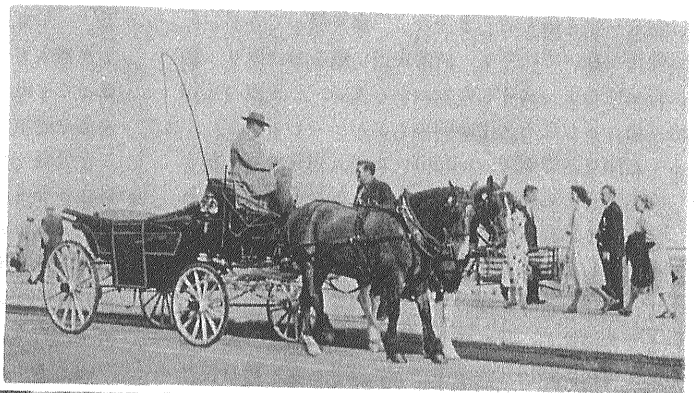
おばけ屋敷(ジプシー遊園地の)



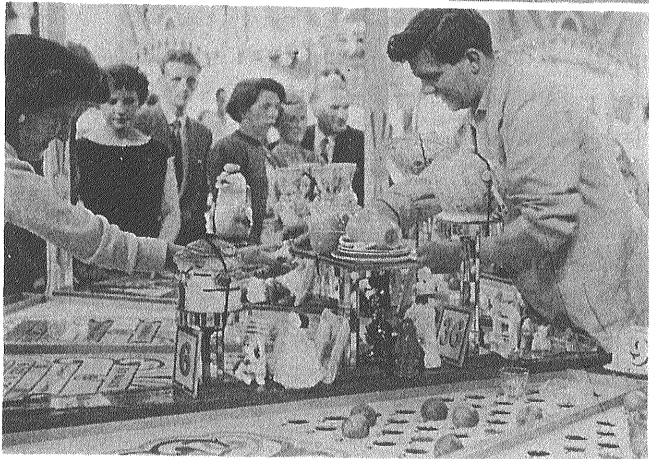
ジプシー遊園地の射的



薄霧のかかったバターシー橋近く



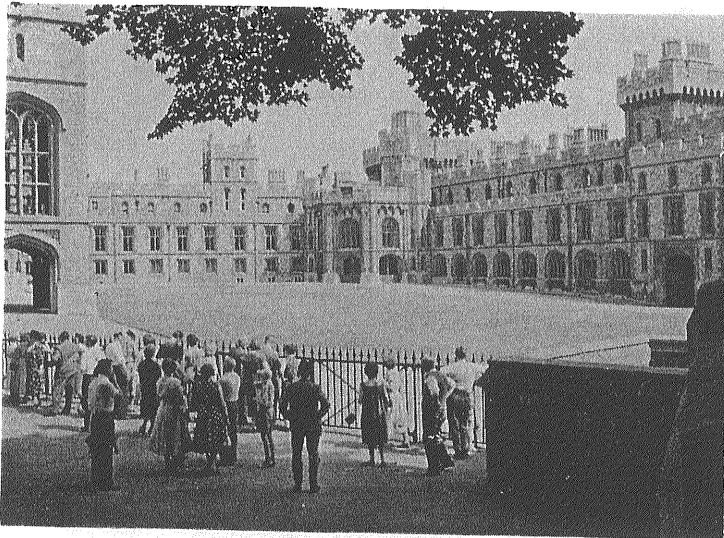
ボクナ・リッチ(南英海岸)の遊歩道



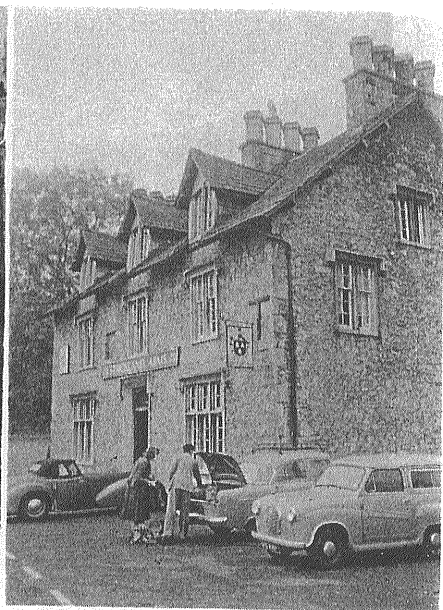
海水浴場にあるルーレット



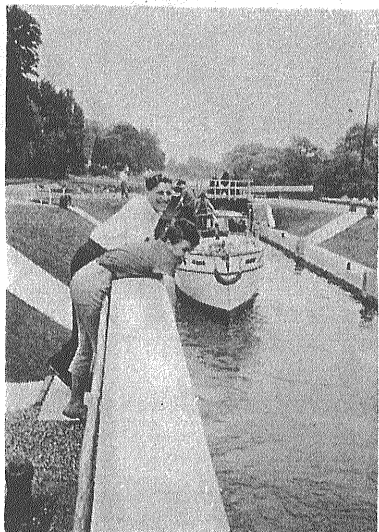
霧の日の写生



ウインザー城

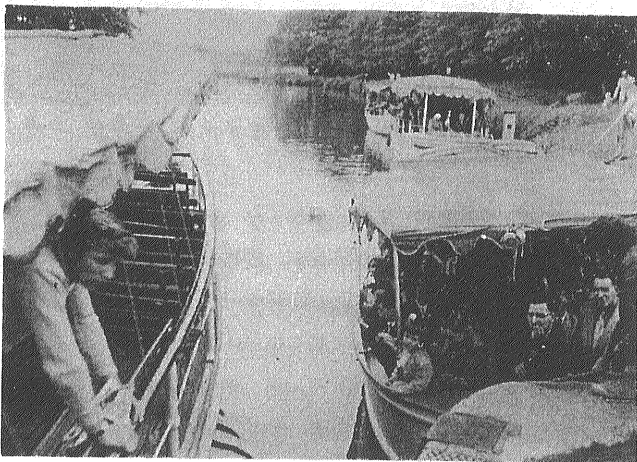


中部英国のいなかのはたごや



→
テムズ川のドック遊覧船は一度ここに入って水位をあげながら上流に向う

↓テムズ川の遊覧船



うす霧のかかったロンドンタワー付近



霧の街を走る2階バス